

# 「三井寺」を歩く

廣田 幸稔

能「三井寺」は、駿河国清見ヶ関（静岡県清水市）に住む女性が主人公です。人商人に浚われた我が子を探して都に上ります。毎夜清水寺の観音に息子の行方を祈念していると、近江国三井寺に行けとの霊夢を授かり、仲秋の名月の下でめでたく息子と再会をはたすというストーリーです。能の舞台は前半は京都市の清水寺、後半は滋賀県の三井寺です。清水寺、三井寺とも西国三十三所巡礼の十四番と十六番の札所であり、能「三井寺」は観音信仰の「札所を結ぶ能」であることを、同志社女子大学教授・廣瀬千紗子先生が指摘されています（第十五回記念廣田鑑賞会パンフレット）。

最近の京都は、これまでにないほど多くの外国人観光客が訪れ、市バスに乗ると何カ国語かの会話が車内を飛び交い、道も車も人で溢れかえっています。清水寺もこれまで以上に人気の観光地となり、静かな信仰の場と言いつつも難くなったのは残念ですが、伝統芸能や伝承のなかでなら、私たちは当時の景色を思い浮かべることができます。

さて、後半の舞台となる三井寺は、JR浜大津駅、または、京阪電鉄・三井寺駅より徒歩10分。滋賀県大津市、琵琶湖の南端に位置する長等山の中腹、眼下に琵琶湖を臨む高台にあります。三井寺の正式名は「長等山園城寺」、天台宗の総本山です。寺の縁起によれば、天智・天武・持統天皇の三帝の産湯に使われた

霊泉があることから「御井<sup>みい</sup>」の寺、「三井寺」と呼ばれたそうです。境内にはあちこちに水路があり、この地が水量豊かな場所であることがわかります。三井寺といえは、比叡山延暦寺との



↑清水寺山門  
山門前の参道には土産物店が並び、観光客で賑わいます



↑音羽山清水寺 清水の舞台で有名です



↑滋賀県 琵琶湖畔 近江八景「唐松の夜雨」

争いで、延暦寺の僧、のちに源義経に仕える武蔵坊弁慶が、三井寺の梵鐘を奪って比叡山まで引き上げた話が「弁慶の引き摺り鐘」として有名です。この鐘は奈良時代に造られたそうです。昔、依藤太秀郷が三上山（滋賀県野洲市、近江富士と呼ばれる美しい山です）に住む、山を七巻半するほどの大ムカデを退治したことから、琵琶湖に住む龍神より贈られた鐘だということでした。

舞台でもシテが「龍女が成仏の縁に任せて わらわも鐘を撞くべきなり」とあり、龍神と縁のある有名な鐘だったことが伺われます。また、良くないことがある時は鐘が汗をかいて撞いても鳴らず、良いことがある時は自ら鳴るといって霊鐘だそうです。現在この鐘は、霊鐘堂に奉安されていますが、その表面にはひと目でわかるほどの傷痕や割れ目が残り、今はその音を聞くことはできません。二代目の鐘は慶長七年（1602）に、豊臣秀吉の正室・北政所によって奉納されたもので、近江八景の「三井の晩鐘」で知られ、宇治の平等院、高雄の神護寺と並ぶ日本三銘鐘のひとつです。金堂（本堂）横にある鐘楼にあり、毎朝夕美しい響きを聞くことができます。

湖が音を吸い込むのか、波の音があたりの音に勝るのか、湖面に向かって立つと、不思議と自動車の騒音が聞こえませんが、「鳩の海」と呼ばれた琵琶湖の広大な湖面に映る月の影は、今も昔も変わりません。仲秋の月を琵琶湖に映して観月祭と洒落るのも、ちょっと贅沢な古典の愉しみかたもしれません。

平成二十八年 神無月吉日



↑三井寺山門  
←初代の鐘は 霊鐘堂に奉安される



←三井寺観音堂